

大正初期、田植時になると、田植をすませた舞鶴の東地区（朝来、志楽方面）から、由良川筋地区へ、野良着のふるしき込みと、巻いたござを持った女人達が、田植人夫として、大勢來たそうである。

田植が一段落して、あぜに腰を下ろして休んでいた時、母が、その田植人夫の五十ばかりの女人の人から教えてもらったのが、この歌である。「むかしは、この歌にあわせて、田植を植えたものだ」と話してくれたそうだが、この話から想像すると、もうこの頃、田植唄は歌われなくなっていたのだろうか。

おわりに

これ以外、「石場つき眼」等、まだ時々耳にする歌もあるが、ここでは、そのように、まだ生活の中に生きているものは除外し、やがて消え去る懸念のあるものだけを拾つてみた。これらの唄以外に、「白ひき眼」その他、現在歌われなくなつた民謡を、知つておられる人があつたら、ぜひ採譜して、一つでも多く残しておきたいものである。

小学校、中学校の音楽教科書にも、毎学年、

日本各地の民謡の教材が載せられている。それを教えることも勿論必要ではあるが、この時間、たとえ、芸術的にすぐれた名曲でなくとも、わたし達の祖先から歌いつがれた郷土

舞鶴市内における板碑型石塔の変遷について

真 下 八 雄

が秘められている。

筆者は先年、市史執筆のための民俗調査を行つた際、市内各地の墓地をも調べて回つたが、その折の探集データによつて、当市における板碑型石塔の変遷過程を述べてみたい。

(注) 近世諸石塔の仏塔系譜上の位置づけについては種々の学説があるが、本稿は土井卓治氏の研究(同氏著「石塔の民俗」岩崎美術社刊)に従つた。

市内堂奥の山口神社前に立つてある石造物は室町時代末期(弘治三年)の板碑であるが、この塔の様々な形態には数百年の歴史的変遷

と同じく塔正面は平滑、背面は荒彫りで、頭部は斜刃が弧をえがいた三角形部と額部とが合体している。頭部は中膨れ様に前へ張り出しており、また塔下部も少し膨れ出でて、これが上下から銘文面を覆つてゐる。塔身部には左右に縁を取つた隅丸長方形の四面に彫り込んで銘文面を造り、ここに題目と銘文が陰刻してある。なお銘文中の「考月」は如何なる人物か判明し得ないが、石塔の規模からすると相当な有力者であったとみられる。

紀年は造塔年でなく考月歿年であろう。尊靈は精靈・聖靈・覺靈・幽靈などと記されることがある。わずかに勾配がある舌形様の頭頂は額部と融合し、そこには横一条線が彫られてゐる。この頭部と塔下部とは上下相対応し弧状に前に張り出て銘文面を囲つてゐる。下方がやや幅狭の塔身正面は左右両端で二段、下部では一段の縁どりをした凹面となつており、ここに戒名・紀年月日が陰刻してある。被葬者は家系的には明らかでないが、城下町出辺の初期豪商夫妻のようであり、紀年銘は夫妻おののの歿年月日である。銘文および石塔測定値は次の通り。

なお、この寛永年銘塔は、石塔全体に堂々としたたくましさ・重厚さがみられ、慶長年身は幅・厚さ共に下方がやや縮まり、根部を土中に埋めて固定されている。慶長三年銘塔四センチメートルもある大型の板石塔で、塔身は幅・厚さ共に下方がやや縮まり、根部を

日本各地の民謡の教材が載せられている。それを教えることも勿論必要ではあるが、この時間、たとえ、芸術的にすぐれた名曲でなくとも、わたし達の祖先から歌いつがれた郷土

の民謡を教えることができたら、郷土を愛する子供達を育成する上からも、大へん喜ばしいことであると思う。

舞鶴市内における板碑型石塔の変遷について

が秘められている。

筆者は先年、市史執筆のための民俗調査を行つた際、市内各地の墓地をも調べて回つたが、その折の探集データによつて、当市における板碑型石塔の変遷過程を述べてみたい。

(注) 近世諸石塔の仏塔系譜上の位置づけについては種々の学説があるが、本稿は土井卓治氏の研究(同氏著「石塔の民俗」岩崎美術社刊)に従つた。

市内堂奥の山口神社前に立つてある石造物は室町時代末期(弘治三年)の板碑であるが、この塔の様々な形態には数百年の歴史的変遷

以上あげた慶長期の石塔は、特に慶長三・十一年銘塔においては中世板碑の形状がよく継承されており、また三塔いずれもが種子・題目が陰刻してあって、その造塔題目には多分に追善供養的意義が存在していたものと考えられる。

慶長紀年銘塔に統く現存の石塔に淨土寺(西町)の寛永九・十年銘塔がある(写真⑤⑥)。この石塔は扁平な板石という板碑の外形からかなり脱皮した厚味をもつ塔で、そのため下端を地中で固定しなくても自立が可能である。わずかに勾配がある舌形様の頭頂は額部と融合し、そこには横一条線が彫られてゐる。この頭部と塔下部とは上下相対応し弧状に前に張り出て銘文面を囲つてゐる。下方がやや幅狭の塔身正面は左右両端で二段、下部では一段の縁どりをした凹面となつており、ここに戒名・紀年月日が陰刻してある。被葬者は家系的には明らかでないが、城下町出辺の初期豪商夫妻のようであり、紀年銘は夫妻おののの歿年月日である。銘文および石塔測定値は次の通り。

なお、この寛永年銘塔は、石塔全体に堂々

としたたくましさ・重厚さがみられ、慶長年

身は幅・厚さ共に下方がやや縮まり、根部を

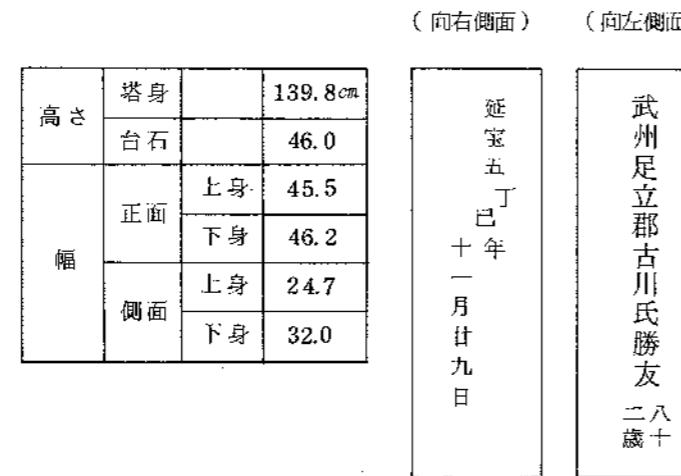
土中に埋めて固定されている。慶長三年銘塔

四センチメートルもある大型の板石塔で、塔

身は幅・厚さ共に下方がやや縮

写真⑪の天和三年銘塔は、古川家石塔と同様に塔身正面の上下幅が下部が僅かに広くなっている。この上下幅は天和以降の石塔についても僅差があるいは同寸法であって、前代にみられた身部下方の縮まりや広がり石塔は例外的存在となる。

元禄期には石塔建立は一段と普及して現存の基數も急増するが、この期における石塔は



実的・現世的傾向を醸し出しているように感じられる。

次のような変化を示していく。すなわち、前代の鋭い三角状尖頭が頂角の鈍化によって丸味を帯びはじめたこと、塔身の正面幅に対する側面幅の比がさらに大きくなつていったことである。後者については、例えば上記の延宝二年銘塔は〇・三（上身部）～〇・四（下身部）であるが、写真⑫の元禄四年銘塔では〇・五となる。なお右のような尖頭の変化に伴つて頂部が少し前方へ湾曲するものが現われている。

寛文～元禄期の石塔は、供養塔婆としての板碑の型式をわずかに尖頭に留める程度に大きく変形し、種子や蓮華座を彫り込んだものは現存塔数の割合から言うと稀少であるなど石塔の追善的役目が後退していくており、一方、銘文中の戒名に「靈位」を付すことが目立つが、これは石塔を靈魂の依代的存在視したものと思われ、これ等のことは当時代人たちの建塔に対する意識の変化を物語つている。

四
宝永期に入ると、石塔頂部の鈍角化は極限に達して（写真⑬）、尖頭は遂に円弧に變りいわゆる櫛型頂頭になる（写真⑭～⑮）。その円弧は、一般には初め比較的高い丸味をも

つが次第に低いものに変形していくとされる。また当期からさらに正徳・享保期にかけて、塔身の側面幅がますます厚くなり、紀年銘をこれまでの正面から側面に刻むこともなされてくる。さらにこのことと並行して塔背面の平滑化が進んでいる。

十八世紀初期の当代は、以上述べてきた旧式の三角尖頭と新式の櫛型頂頭との両石塔が併存した時期で、前者はこの間に漸次衰退していくようであるが、例外的にはさらに後世の宝曆八（一七五八）年銘（見樹寺）のももある。

なお、前代の石塔に一部みられた頂部の前湾曲が、宝永・正徳期には尖頭・櫛型頂頭を問わざなり増加していく。

石塔側面の拡幅化は享保以後も進行し、塔身横断面は長方形から正方形に近づく角柱型となる。これを、ちなみに本橋掲載写真の石塔について見ると、塔身正面幅に対する側面幅の比が、元文元年銘塔（写真⑯）〇・七九、寛保元年銘塔（写真⑰）〇・八八、明治九年銘塔（写真⑲）〇・八三、文化九年

雪空梅翁禪定門
寛永拾癸酉二月廿三日

宝山妙好禪定尼
寛永壬辰拾月廿一日

高さ	90.3 cm
幅	60.5
上身	58.5
下身	56.1
厚さ	21.0
底	

寛文～元禄期に至ると、十七世紀後半における諸産業の発達、なんんなく商品・貨幣経済の進展を背景として、石塔自体は前代のものよりもだいぶ小型化はするけれども、立塔の風習は有力階層のみならず庶民階層にまで、また城下町から村々へと伝播した。

和期の紀年銘のものであるが、いずれも頂角が直角に近い三角形状の尖頭をなしているのが特徴である。また時代の経過とともに、前代では荒彫りのままであつた塔背面の左右を平滑にして明瞭な側面を造り出したり、塔身の正面幅に対する側面幅（厚さ）の比を大きくして塔の座りの安定を図つたりしている。頂頭の背部は前代は頂上に向けて先細り様となつてゐたが、当代の天和期になると頂面と背面の稜角を落して弧状にしている。この背面の弧状は享保期の石塔にまで継承されている。塔身正面は周囲を縁で巻いた隅丸の四辺形や火燈形の凹面に形づくつてある。

写真⑦⑧は寛文九年銘のまだ側面のない板状石塔で、塔身は慶長・寛永年銘塔の如く下方が幅縮まり様となつてゐるが、背面下部を膨らませて底面積を広くし塔を安定させている。銘文面は慶長十一年銘塔に似た上部隅丸の長方形で、戒名・歿年月日が刻んである。銘文と石塔測定値は次の如くである。

還本照室寿光信女位
寛文九年三月二日

高さ	76.0 cm
上身	34.0
下身	32.2
身	10.0
底	19.5

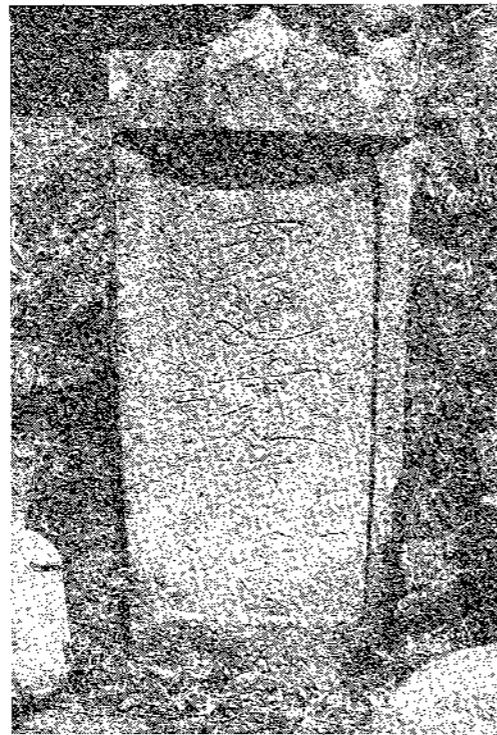
なお、前代の形状を比較的よく残したこの石塔の同型塔は延宝～元禄期にも散見し得る。写真⑨。図④は延宝二年銘の石塔で、まだ幅狭ではあるが平滑な側面ができるおり、また塔身の正面幅は下方を未広にしてそこに火燈状の凹面を造つてある等、右の寛文九年銘塔に比べると飛躍的な変化をしている。なお塔下部に蓮弁の面刻してあるが、これは後世には蓮弁の面刻となつていく。

写真⑩は田辺藩家老職古川家の延宝五年銘塔であるが、その家格にふさわしく当代のものとしては珍しい大形石塔で、側面は厚味を増し、戒名以外の銘文はこの両側面に誌している。銘文・塔測定値は左の通りである。

緑松院殿忠山久古居士
（正面）



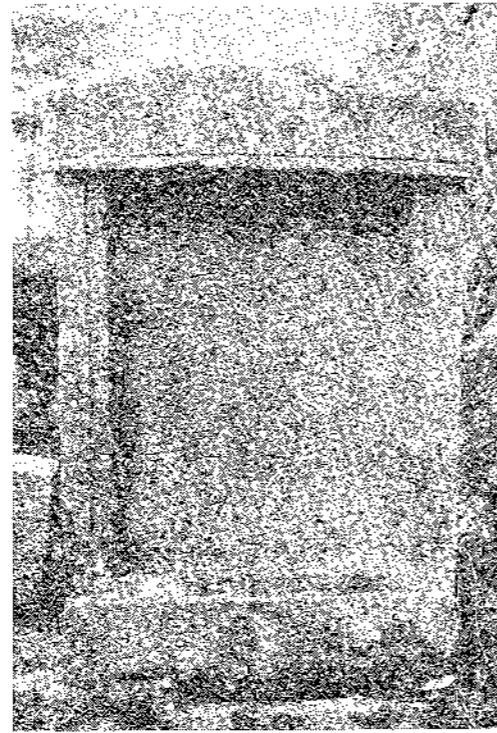
(4) 慶長15(1610)年銘塔(金剛院)



(3) 慶長11(1606)年銘塔(無常院墓地)



(6)、(5)の横側



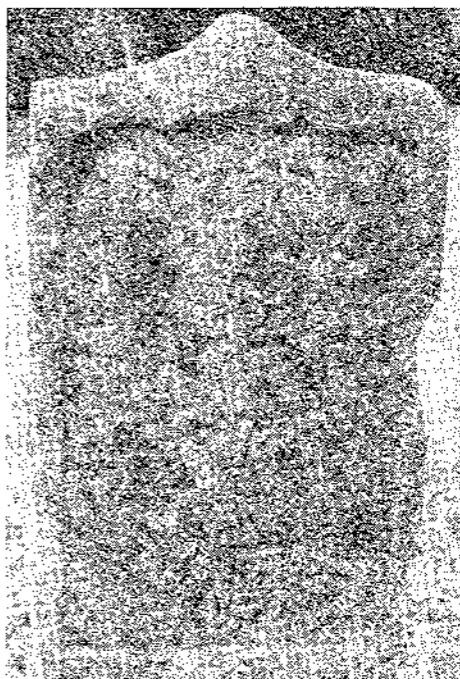
(5) 寛永9、10(1632、33)年銘塔(浄土寺)

この形状変化の経過の中で以下の如き現象が生じている。すなわち前代までにみられた頭頂部前面の湾曲と背面の弧状が全く消失して両面ともに垂直となること、塔身側面の上・下幅が同一になり完全な角柱塔化すること、頭頂の型式が前代からの櫛型の外に、方錐型(写真⑨)、宝珠型(写真⑩)、水平型(平頂)が現われてくること等である。

なお、塔身を据える台石は江戸時代全期を通して一段が普通であるが、明治時代以後になると二段さらには三段として石塔の立体化を図っている。このような造塔の豪華傾向は、石塔が死靈の依代的存在としてよりも、被葬者の記念碑的 existence として強く意識されるようになった結果であろう。

六

以上、近世以降における板碑型石塔について、各期の主流的型式の変遷を概観したのであるが、勿論、この年代的推移から離れた傍系的石塔もみられる。一例をあげると図⑩の明和九年銘塔がそれで、図示の如く塔身の幅狭く厚さの薄い・スマートではあるが華奢な感じの石塔で、自立が困難なため身底部に枘(ほぞ)を造つてこれで台石に固定している。



写真① 弘治3(1557)年銘板碑(堂奥)



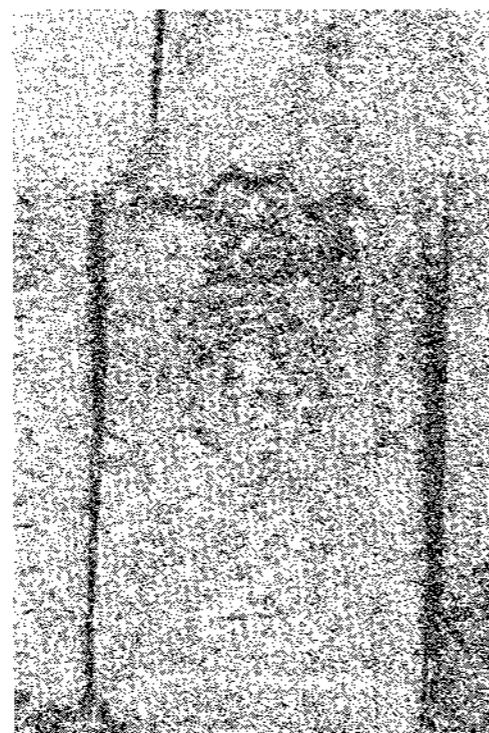
(2) 慶長3(1598)年銘塔(金剛院)

この型式の石塔は既に享保期に出現していくが、宝曆・明和頃頃をピークに衰微していくようである。

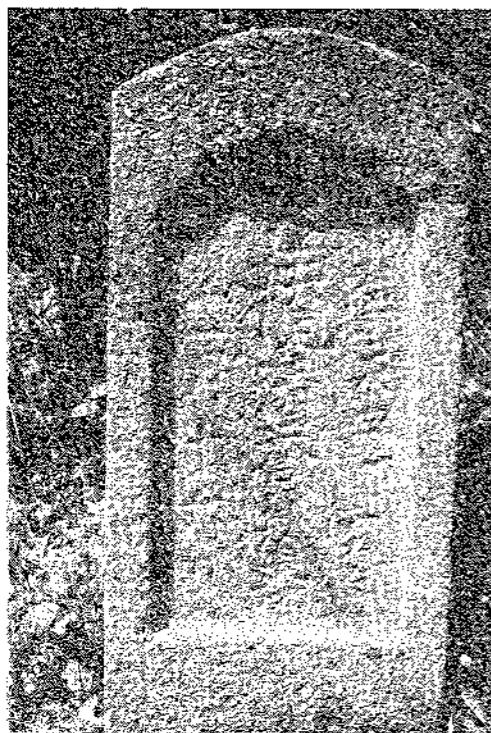
石塔には、その他、五輪塔・笠塔婆・自然石塔など塔数は僅少ではあるが現存している。これらの説明は後稿に譲りたい。



⑫ 元禄 4(1691)年銘塔(伊佐津墓地)



⑪ 天和 3(1683)年銘塔(桂林寺)



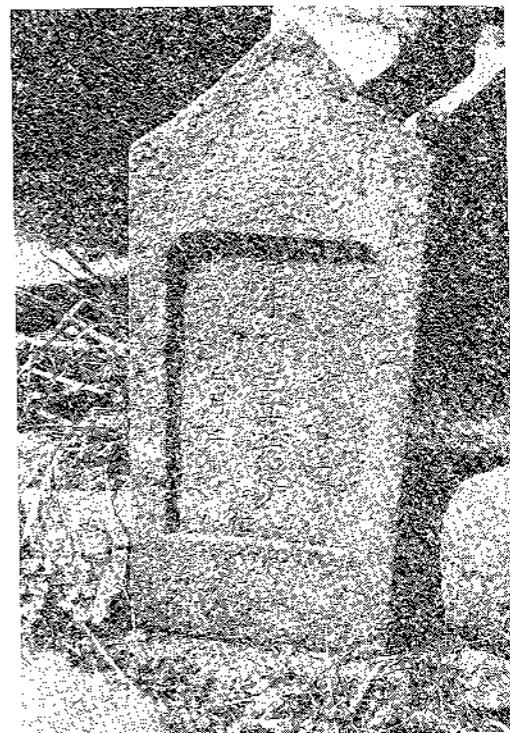
⑭ 宝永 4(1707)年銘塔(見樹寺)



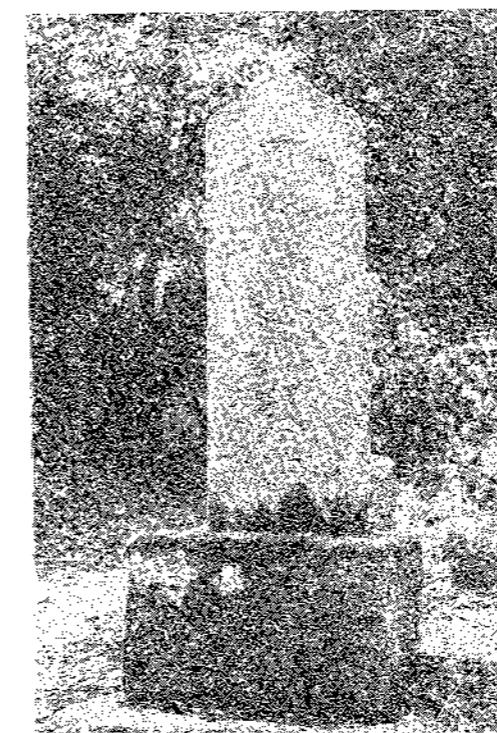
⑬ 宝永 2(1705)年銘塔(伊佐津墓地)



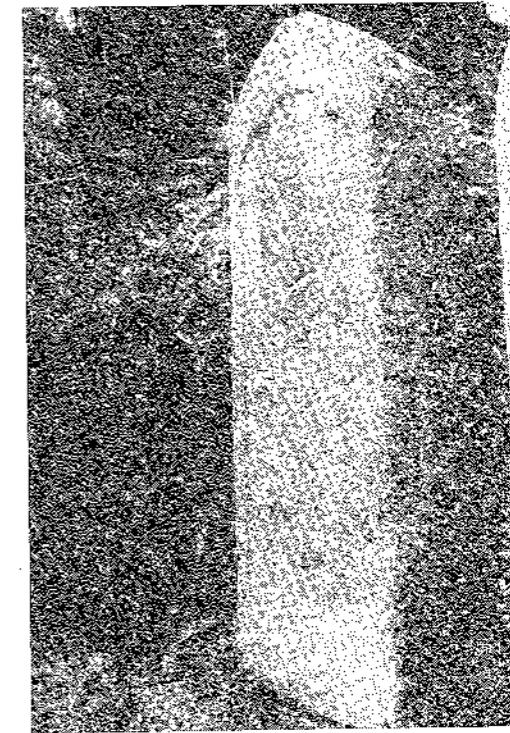
⑧、⑦の横側



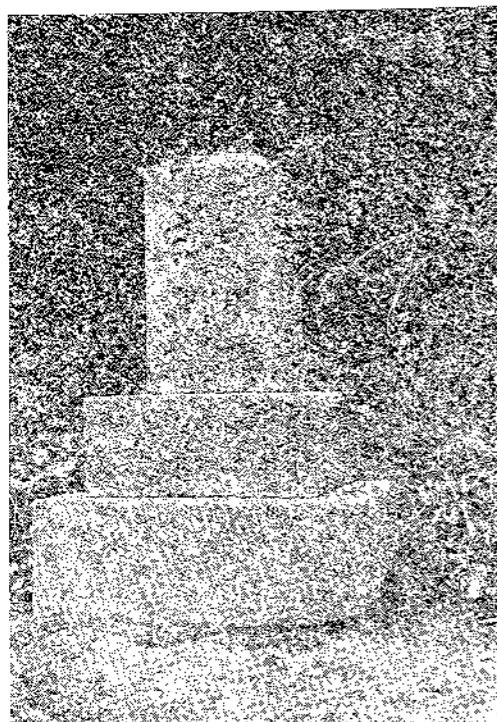
⑦ 寛文 9(1669)年銘塔(浄土寺)
(カ)



⑩ 延宝 5(1677)年銘塔(見樹寺)



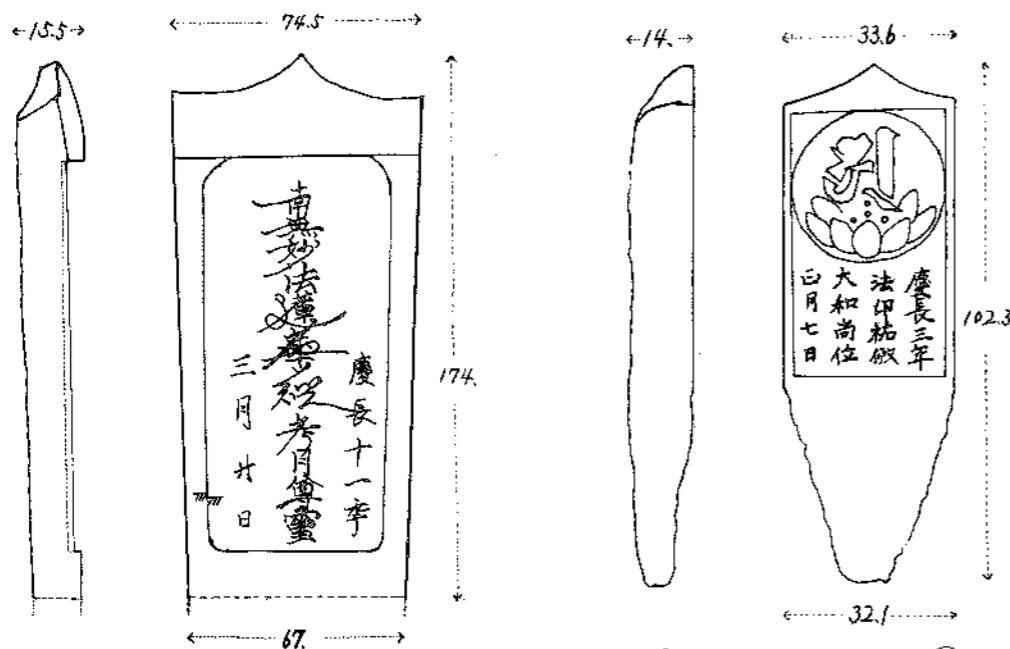
⑨ 延宝 2(1674)年銘塔(見樹寺)



⑯ 明治 9 (1876) 年銘塔 (伊佐津墓地)

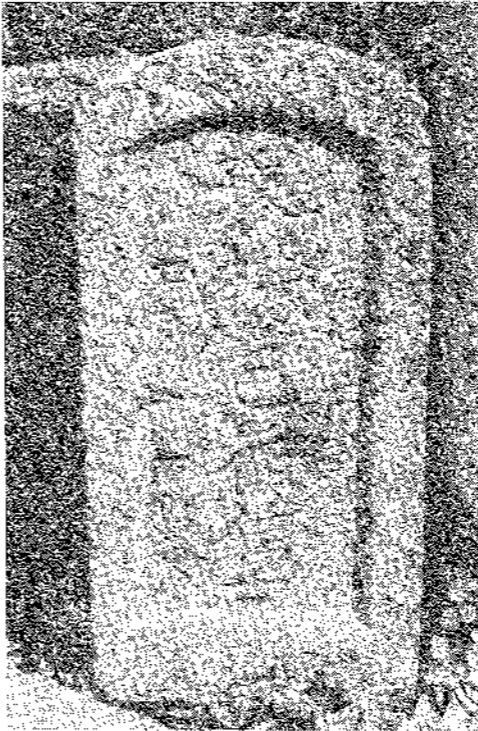


⑰ 文化 9 (1812) 年銘塔 (伊佐津墓地)



⑱ 慶長 11 年銘塔 (写真③)

(注) 測定単位は cm



⑲ 享保 7 (1722) 年銘塔 (桂林寺)



⑳ 正徳 2 (1712) 年銘塔 (桂林寺)



㉑ 宽保 1 (1741) 年銘塔 (瑞光寺)



㉒ 元文 1 (1736) 年銘塔 (伊佐津墓地)

会誌創刊十周年記念号を出してはという話は前々から起っていましたが、それが五月の例会で取り上げられて、会員全員が必ず八月末を目どに各自の研究をまとめて提出し、これを十九・二十号合併の記念号にして発行することとなりました。

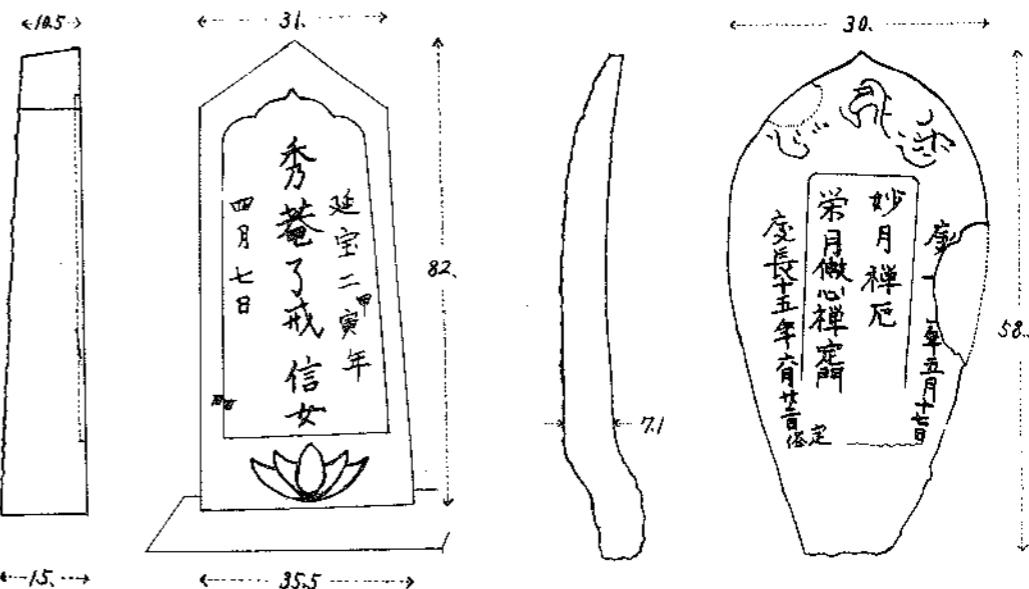
ところが、原稿が予定どおりにはなかなか集まらず、また編集子の怠慢もあって十周年内にはその目的を果し得ませんでした。しかし、全会員の寄稿ということは叶えられませんでしたがようやく原稿も出揃い、甚だ遅ればせながらここに発行の運びとなりました。遅延の程を重ねがさねお詫びいたします。

さて、「時間」には敏感かつ厳格であらねばならぬ歴史を学ぶ者が、発行年月日を改ざんするごときは不届千万この上もないことではあります、当研究会の発足は、井上氏の投稿一文にもありますように、三十九年十一月五日までの、この月日をメモリーする意味でも、十周年記念号に相応しい本号の刊

編集後記

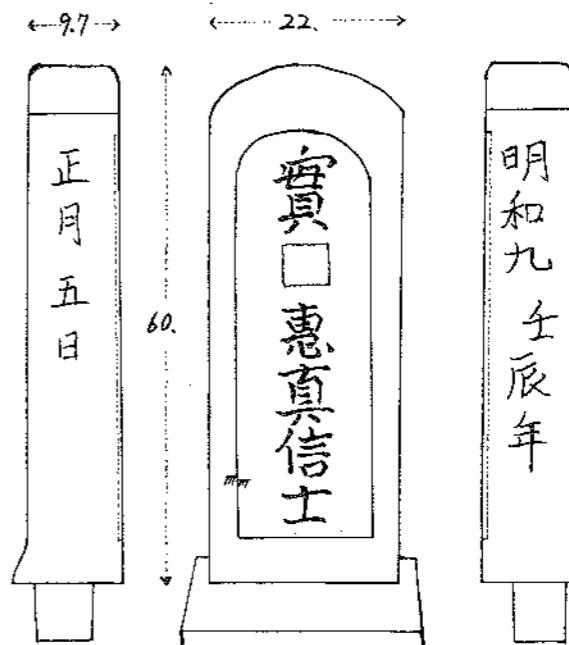
行月日を五十年十一月五日とさせていただきました。御了承ください。
最後に、次の十年後にはより充実した二十年記念号が発刊し得ますよう、当研究会のますますの発展を期待してやみません。

—(真下記) —



(d) 延宝2年銘塔（写真⑨）

(c) 慶長15年銘塔（写真④）



(e) 明和9(1772)年銘塔（伊佐津墓地）